

mizuki

みずき
第10号



大阪医科大学附属病院 病院医療相談部 医療連携室ニュース ● 2008年7月発行



contents

- 新任部長のご挨拶 P.1
- 病院長就任のご挨拶 P.2
- 新任のご挨拶 P.3
「中央放射線部、放射線科、リハビリテーション科」
- 診療科の紹介「膠原病内科」 P.4
- 診療科の紹介「皮膚科」 P.5
- 医療連携室から P.6
- 今後の予定 P.6
- 編集後記 P.6

新任部長のご挨拶

このたび、4月1日付で病院医療相談部部長に木下光雄が就任いたしました。



病院医療相談部部長
木下 光雄 (きのした みつお)

暑さが日ごとに加わってくる季節になりました。皆様におかれましてはご清祥のこととお慶び申し上げます。いつも病院医療相談部をご支援いただき、誠にありがとうございます。本誌みずきは、病院医療相談部と地域の医療関係者の皆様との架け橋となるような情報誌を目指して2005年6月に創刊させて

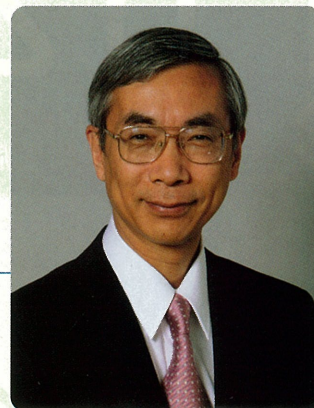
いただき、ちょうど丸3年が経過しました。本誌の創刊当時から関わってまいりました花房俊昭前相談部長の附属病院長への昇任にともない、私こと木下光雄が後任として本年4月1日から本病院医療相談部を担当させていただいております。引き続きご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

昨今、医療を取り巻く環境はますます厳しさを増し、医療サービスを提供する側のみならずクライアントも過酷な状況下におかれていると言っても過言ではないように思います。私たちが直接関わっている医療問題のほかに、食の安全の問題や人為的な原因からもたらされる地球環境の悪化も人々の健康にとって大きな脅威となっており、安心安全の医療がより一層求められています。このような時代においては、医療関係者間において適切に情報を共有することはリスクを回避するためにも必要となりますし、十分なコミュニケーションをとることがポイントになるかと思えます。この意味でも、本誌の果たす役割は小さくないように思われます。皆様方のお役に立てますよう担当者一同努力してまいりますので、今後ともみずきをご愛顧いただきますようお願い申し上げます。



病院長就任のご挨拶

病院長
花房 俊昭



私は、本年4月1日から大阪医科大学附属病院長を務めさせていただいております花房俊昭と申します。日頃から当院に対しまして種々御指導を賜り、心より感謝申し上げます。今後さらに地域医療機関の先生方との連携を深め、高度な医療と地域に根ざした医療の実現に努力してまいりたいと存じますので、何卒よろしくお願い申し上げます。

本院の理念は「地域社会のニーズに応える安全で質の高い医療を皆様に提供するとともに、良識ある人間性豊かな医療人を育成します」です。本院はこの理念をさらに高いレベルで実現すべく、日々改善の努力を重ねております。本院の最近のトピックスを、いくつかご紹介させていただきます。

ハード面では、病院7号館の完成に伴い、患者さまの療養環境が著しく向上するとともに、各フロアを循環器センター、消化器センター等、診療内容によって分けることにより、高度な医療と患者さまにわかりやすい医療の両立を実現いたしました。また、増加の一途を辿る手術数に対応できるよう、手術室を計3室増設いたしました。

ソフト面では、看護師の7対1配置をいち早く実現し、患者さまに対するケアの質を向上させました。また、患者さまに安心して治療を受けていただけるよう、「医療安全推進部」「感染対策室」を開設・充実させております。さらに、病院の窓口となる「病院医療相談部」の利便性も向上させ、地域の医療機関からご好評をいただいております。加えて、「外来化学療法センター」のスペース拡大、「がん相談支援センター」の設置など、がんでお悩みの患者さまやご家族に対するきめ細かなサービスを可能にいたしました。また、「大阪府地域周産期母子医療センター」の認定を受け、母子医療の充実も評価されております。一方、高槻市医師会と共同で「地域連携パス」を作成し、患者さまが医療機関を移られても、治療が切れ目なく受けられるシステムを構築しております。

本院職員一同は日々研鑽を積みながら、地域の医療機関の皆様方と手を携えて、患者さまが本院で治療を受けられたことを心から喜んでいただけるよう、皆様を笑顔でお待ち申し上げます。今後とも御指導の程、何卒よろしくお願い申し上げます。

新任のご挨拶 ● 中央放射線部 ● 放射線科 ● リハビリテーション科



中央放射線部 部長
鳴海 善文 (なるみ よしふみ)

CTの多列化による画像診断能の進歩はめざましく、造影剤の投与タイミングの最適化による肝、脾、腎、消化管など腹部領域疾患の診断はもとより、CT angiographyにより冠動脈、胸部大動脈、下肢動脈などの動脈硬化性疾患、HRCTによる胸部疾患の診断など、近年大きな変化がみられます。一方、MRIは頭部(脳外科、神経内科)、骨盤(泌尿器および産婦人科疾患)、整形外科領域などに適応が多くみられ、最近ではさらに高磁場装置により画像の高精細化がみられます。中央放射線部ではこれらのCT、MRIによる検査を施行し、放射線科専門医による画像診断レポートを発行しています。またIVR専門医による肝臓癌、子宮頸部癌などの経カテーテル治療を行っており良好な治療成績をおさめています。さらに骨シンチ、心筋シンチなどの核医学検査、注腸造影や胃透視などの消化管検査、DIPなどの泌尿器系検査の施行と読影を行っています。

全ての診療科にまたがるこれらの検査とIVR、および放射線治療が中央放射線部の任務と考えておりますので、今後ともよろしくご依頼申し上げます。



放射線科 科長
猪俣 泰典 (いのまた たいすけ)

放射線治療は効果よりも障害が心配であるとの印象が現在でもなお根強く残っています。しかし、これまでの十数年間における放射線治療機器・治療技術の進歩はめざましく、病巣に限定してより多くの放射線を照射することができる一方で正常臓器への被曝を少なくすることが可能となりました。このため現在の放射線治療では高い癌の根治率とともに、よりすぐれたQuality of life (QOL)の保持を実現しています。大阪医科大学でも現在望みうる最高水準の放射線治療関連機器が完備しつつあります。

放射線治療のニーズが高まっている昨今、当科では年に40-50名ずつ新患が増加しており平成19年には600名を超えました。欧米と同様に日本でも乳癌や前立腺癌が著しく増加しています。乳癌では乳房温存療法の一環として、前立腺癌では永久刺入・一時刺入組織内照射とIMRT(強度変調放射線治療)、さらに脳の病巣にはピンポイントで照射するStereotactic radiosurgery (SRS)等、より低侵襲で高い局所制御効果を目指した治療を積極的に行っています。



リハビリテーション科 科長
佐浦 隆一 (さうら りゅういち)

大阪医科大学附属病院リハビリテーションセンターは、昭和62年に開設以来、先達のご努力、また近隣地域の先生方のご協力により、これまで急性期リハを中心としたリハ医療を提供して参りましたが、このたび、さらにリハ臨床の充実、医学教育(人材育成)、研究を進展させるべく、平成20年5月1日をもって総合医学講座リハビリテーション医学教室に昇格いたしました。

リハビリテーション医学は、様々な運動・精神機能障害を負った方々に対して、発症直後から地域に戻るまで横断的、かつ切れ目のない各種介入を行い、その人がその人らしく生きていくことができるための、お手伝いをさせて頂くことを目標としています。今後本院では、急性期・特定機能病院としての特性を活かしたリハを提供するだけでなく、地域の医療機関、先生方との連携を密にとり、患者さま、障害をもつ方々が急性期から回復期そして維持期へ、医療機関から地域へとスムーズかつ継続的にリハを受けて頂くことができるように努力をしていく所存です。

地域の皆様に信頼される大阪医科大学附属病院の一員として恥じることがないよう、これからも頑張ってお参ります。今後とも、ご指導ご支援を宜しくお願い申し上げます。

●専門分野 / 放射線診断学、IVR

●資格 / 放射線科専門医

●略歴

昭和56年 3月 大阪医科大学卒業
昭和60年 10月 大阪府立成人病センター放射線診断科
平成3年 12月 カリフォルニア大学サンフランシスコ校(UCSF)放射線科
平成7年 6月 大阪大学医学部放射線医学教室 講師
平成9年 4月 大阪大学医学部附属病院放射線科副部長兼助教授
平成14年 2月 市立貝塚病院放射線科部長
平成14年 7月 大阪大学大学院医学系研究科診療画像情報学寄付講座客員教授
平成17年 4月 大阪府立成人病センター放射線診断科 主任部長
平成19年 4月 ハイメディック クリニック ウェスト 画像診断センター長
平成20年 4月 大阪医科大学総合医学講座 放射線医学教室教授

●趣味・特技 / 映画鑑賞、サッカー

的確な治療を行うための前提として精確な診断が必須です。放射線科は画像診断と放射線治療を専らとしていますので、診断部門と治療部門とが密接に連携してこれからもより質の高い医療を提供するべく、放射線科医師一同決意を新たにしています。今後とも宜しくお願い申し上げます。

●専門分野 / 放射線治療

●資格 / 放射線科専門医、日本放射線腫瘍学会認定医
日本医学放射線学会代議員、日本放射線腫瘍学会評議員

●略歴

昭和55年 3月 神戸大学医学部卒業
昭和60年 4月 高知大学医学部助手
平成元年 11月 高知大学医学部講師
平成12年 8月 大阪医科大学助教授

●趣味・特技 / 音楽鑑賞(ブルックナー)、美術館巡り

●専門分野 / 運動器リハビリテーション医学、
脳血管疾患リハビリテーション医学、体力医学、リウマチ学

●資格 / リハビリテーション科専門医・研修施設指導責任者
整形外科専門医、リウマチ専門医・指導医
義肢装具等適合判定医、
身体障害者福祉法第15条指定医(肢体不自由)

●略歴

昭和61年 3月 神戸大学医学部卒業
平成5年 6月 神戸大学病院理学療法部助手
平成8年 10月 神戸大学医学部保健学科医療基礎学講座助教授
平成16年 10月 神戸大学病院患者支援センター副センター長(兼任)
平成18年 4月 兵庫県立西播磨総合リハビリテーションセンター
リハビリテーション西播磨病院副院長
平成19年 4月 神戸大学大学院医学系研究科医科学専攻 連携大学院
リハビリテーション運動機能学客員教授(兼任)
平成20年 5月 大阪医科大学総合医学講座リハビリテーション医学教室教授

●特徴 / 血液型: B型、六星占術: 火星(+), どうぶつ占い: ベガサス

診療科の紹介 ● 膠原病内科



膠原病内科 科長

榎野 茂樹

当科は以下の領域を得意としています

膠原病のなかでも、重篤な疾患である全身性エリテマトーデス・血管炎・皮膚筋炎/多発性筋炎・膠原病肺と最近治療手段の発展の著しい関節リウマチに対し十分な治療実績を持っています

膠原病は全身性疾患で病変が多臓器にわたるため、どの臓器病変を治療の主たる対象にするかを臨機応変に決定する必要があります。同一病名であっても患者さんに応じ、強力な免疫抑制療法から、症状に応じた対症療法のみまで幅のある治療選択が必要です。当科は他の診療科とも緊密な連絡をとりながら、患者一人一人に適切な治療法を考えていくのが基本的スタンスです。さらに当科では、メンバーの鍵谷が血液浄化センターにも所属しており、白血球除去療法(LCAP)や二重膜ろ過血漿交換療法(DFPP)といった血液浄化療法をタイムリーに行える体制ができあがっており、前者は関節リウマチや血管炎に後者は全身性エリテマトーデスや血管炎の治療に活用しています。

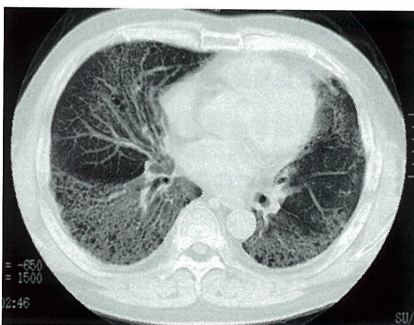
当科は膠原病の中でも、全身性エリテマトーデス・血管炎・皮膚筋炎/多発性筋炎の患者が多く、これらの疾患は病態の急変や重篤化が起り易く生命予後が不良です。ただ、最近の免疫抑制療法の発達はこれら重篤な膠原病の治療成績の改善をもたらしています。当科では、種々の免疫抑制剤(シクロスポリン、タクロリムス、シクロフォスファミドなど)を旧来の治療の主役であるステロイドに積極的に併用することにより、また、これら疾患に伴う難治病態である中枢神経ループス、重症ループス腎炎、進行性間質性肺炎、肺泡出血、血栓性血小板減少性紫斑病、血球貪食症候群等に対しステロイドパルス、シクロフォスファミドパルス、血漿交換療法などを採用することにより治療成績を改善し死亡率を低下させてきました。特に膠原病性の間質性肺炎(膠原病肺)については約200人の患者を管理し病型を的確に判定し必要な患者には免疫抑制剤(シクロスポリン、アザチオプリン、シクロフォスファミド)を積極的に使用し良好な治療成績を得ています。特に予後が不良な事で知られる皮

膚筋炎に伴う亜急性/急性の間質性肺炎に対しシクロスポリンの早期大量療法を積極的に施行し全国でも有数の良好な治療成績を達成しています。

関節リウマチに関しては、近年、次々に新しい治療が開発され関節の骨破壊の進行を食い止められるようになってきています。当科では抗TNF- α 剤(インフリキシマブ、エタネルセプト)、タクロリムス、白血球除去療法といった新しい治療を積極的に採用した最先端の治療を行っています。さらに今後適応となるトシリズマブやアダリムマブも積極的に採用していく方針をとっています。



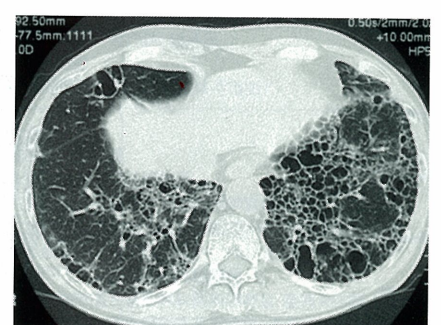
破壊の進んだ関節リウマチ患者の手・手指関節



強皮症に伴う間質性肺炎



皮膚筋炎に伴う間質性肺炎



関節リウマチに伴う間質性肺炎

診療科の紹介 ● 皮膚科



皮膚科 科長

清金 公裕

近年、皮膚科における診断・治療機器の発展にはめざましいものがあります。
当科でも新しい機器を導入し、幅広い皮膚疾患に対応しております。

当科では、幅広い皮膚疾患に対して迅速に対応し、しかも高度な医療を提供できるよう努力しております。臨床所見のみでは確定診断が困難な症例に対しては皮膚生検を行い、カンファレンスで詳細に検討し、診断の上治療方針を決定しております。一昨年には色素性病変にはダーモスコピーによる診断も行っています。ダーモスコピーとは、病変を10～30倍に拡大する拡大鏡の一種で、この機器を使うことで肉眼では見えなかった皮膚の内部構造がかなりわかるようになり、悪性の色素性病変かどうかを判断するための材料がより多く得られるようになりました。以前より難治性の乾癬には紫外線療法を行っていましたが、今年の5月からナローバンドUVB療法の照射機器が新しくなりました。従来の機器では一面の照射しか出来なかったため、全身を照射するのに前面後面の2回照射していましたが、新しい機器では一度で全身の照射が可能になり、治療効果も上がることが期待されます。また昨年より各種ワイヤーを用いた巻き爪の矯正術も開始しました(自費診療)。

専門外来は光線過敏症・遺伝外来、アトピー外来、レーザー外来、ケミカルピーリング外来を開設しております。光線過敏症・遺伝外来では紫外線や可視光線がその発症に関与するすべての皮膚疾患の精査と治療、遺伝性皮膚疾患の診断確定と遺伝相談(自費診療)を行っており、主として色素性乾皮症の確定診断を細胞生物

学的、分子生物学的手法を駆使して行っています。アトピー外来では、悪化因子を検索し、個々の症例に合わせた治療を行っております。レーザー外来では保険診療としてQスイッチアレキサンドライトレーザーによる太田母斑、異所性蒙古斑の治療、色素レーザーによる単純性血管腫、莓状血管腫、毛細血管拡張の治療、CO₂レーザーによる良性隆起性皮膚腫瘍の治療を行っております。昨年には自費診療としてQスイッチアレキサンドライトレーザーによるしみ、そばかす(老人性色素斑、後天性真皮メラノサイトーシス、雀卵斑など)の治療も開始いたしました。ケミカルピーリング外来では主に難治性の痤瘡(にきび)に対する治療を行っております(自費診療)。

医療システムの改編が進む中、病診連携を推進することは重要な課題の一つです。諸先生方との密な連携を図りながら、患者さまの立場に立った医療を進めて参りたいと思っております。治療方針に関してお困りの症例などがありましたら是非ご相談ください。



ダーモスコピー



ダーモスコピーによるほくろの診断



ナローバンドUVB照射機器



医療連携室から

かかりつけ医をおもちではない方にかかりつけ医をご紹介します。当院での治療を終了した方に主治医からの依頼で今後のフォローをしていただける医療機関をお探しするのも私たちの大切な仕事のひとつです。患者さまの病状や希望の地域などを考慮しながら、患者さまと一緒に探しています。

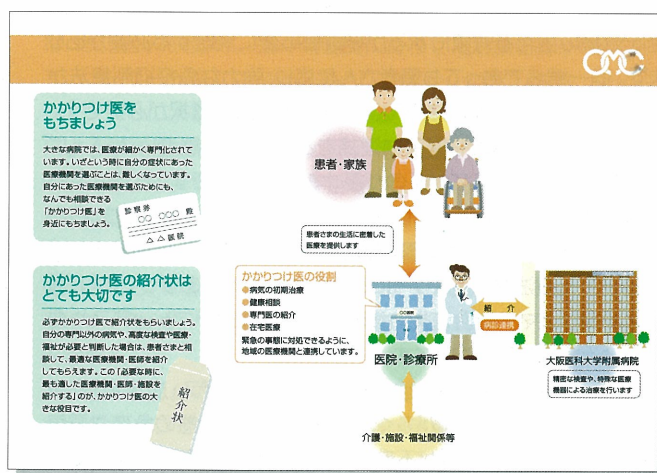
参考にするのは各医師会が発行している医療機関ハンドブックやインターネット、私たちが直接訪問して集めた情報等々。場合によっては何か所もの医療機関に直接電話をかけ、患者さまの希望に沿えるかかりつけ医をお探しすることもあります。

医師から「これからは普段のフォローは近所のお医者さんで」と言われても「やっぱり大きい病院の方が安心だから」と、残念ながらかかりつけ医探しに消極的な方もいらっしゃいます。そのような方にはかかりつけ医をもつことのメリットをお伝えし、医療機関同士が連携して患者さまをフォローしていることを説明させていただきます。



かかりつけ医についてご理解いただくために新たにリーフレットも作成いたしました。

転居に伴う医療機関探しもしておりますので、私たちが探す医療機関は全国が対象です。これを読んでくださっている先生方をお願いすることもあると思います。その際にはご協力のほどよろしく願いいたします。



今後の予定

●三島圏域がん・緩和医療セミナー

日時／平成20年8月30日(土) 14:00～ 会場／大阪医科大学 臨床第一講堂

講師／国立がんセンター中央病院 放射線診断部 部長 荒井 保明 先生

※事前申込みは不要です。

編集後記

暑さ本番を迎え、ビールのおいしい季節となりました。今年のはわが阪神タイガースが開幕から快進撃を続けていますが、この号が発刊される頃にどうなっているのか少しばかり気掛かりです。

一方医療界に目を向けると、診療報酬改訂による歪み、後期高齢者医療制度を巡る大混乱、いつまでも続く医師不足等による医療崩壊の連鎖と明るい話題がほとんど無いのが現状です。このような中、臨床現場で勤務する医療従事者が少しでも自意識が高揚するような話題提供が望まれます。

病院医療相談部では初代部長の花房俊昭が病院長に就任し、整形外科教室教授 木下光雄を新部長に迎えました。新たな体制の下、気分を一新してますます地域医療の発展に努めてまいります。

(T.S)